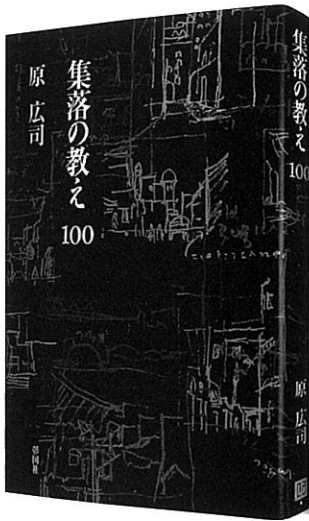


『集落の教え100』 原広司 著

東京大学 大学院工学系研究科 教授

西村幸夫

彰国社、1998年



代表作「京都駅」で知られる原広司

氏は東大で教鞭をとった建築家。本書は、氏が1970年代を中心に20年以上にわたって世界各地で精力的に集落調査をしてきた成果を、大学退官後にまとめたもの。思想は昇華され、建築的な集落分析というよりも、集落に寄託して、集まって住むことや集落の存在そのものに対する哲学的な思索の結晶という側面が強い。味わい深いだけでなく、詩文のような香りに満ちている。

100の教訓とはたとえば、次のようなものである。

「同じものをつくるな。」

同じになろうとするものは、すべて変形せよ。(教え2)

「すべてのものにはすべてがあるのだから、どんな小さな

ものでも世界を表現できる」(教え5)

「ある場所の伝統は、他のいかなる場所における伝統でもある。」(教え8)

「複雑なものは単純化せよ。単純なものも複雑化せよ。その手続きの複雑さが人の心をうつ。」(教え13)

「集落は物語である。集落の虚構性が、現実の生活を支える」(教え21)

「場所に潜んでいる自然の力を最大限に誘起せよ。その平衡状態が集落の姿であり、社会の秩序である。」

「だから、自然は常に社会化されていて、厳しい自然のもとで集落は安定する。」(教え27)

「合理的な解決は、一通りではない。すべての要請が、一気に解決されるような解答は、この世にないからである。

最も特異な解決を選び、それを一般化せよ。」(教え61)

本としては、これらアフォーリズムを象徴する写真が添えられ、下部に小さな字で裏付けのための考察がつけられている。そして巻末に長い長い補注がある。

それにしてもこのような切り詰めた思想の営みが可能だったのは、すべてをそぎ落として、生きるこの本質が粗削りに露出しているような世界各地

の原初的な集落の姿に著者が接したからだったのだろう。ぎりぎりの状況を全身で体感することが、思索を沈潜させるとともに、端的でリリカルな表現を生み出している。

原氏は長い集落調査の旅の末に、集落のあらゆる部分は「計算されつくしたデザインの結果である」(教え1)ということを感じ得る。ものの本質を極めるといふことと芸術性の高い表現とはコインの表裏であるということ、身を削る努力がそうした高みを可能にするのだということはこの本は教えてくれる。わたしの目標の1冊である。



西村幸夫(にしむら・ゆきお) 東京大学大学院工学系研究科教授。1952年福岡県生まれ。東京大学都市工学科卒業、同大学院博士課程修了。明治大学助手、東京大学助教授を経て、1996年から東京大学教授。2011～2013年東京大学副学長、2013～2016年東京大学先端科学技術研究センター所長。2016年より現職。主な近著に『まちを読み解く』(共編、朝倉書店、2017)、『世界文化遺産の思想』(共編、東京大学出版会、2017年)、『都市経営時代のアーバンデザイン』(編、共著、学芸出版社、2017年)、『図説都市空間の構想力』(東京大学都市デザイン研究室編、学芸出版社、2015年)など